4 提言

(1) これからの教育の方向性について

①Society 5.0 とブーカの時代に個人・地域・世界・地球のウェルビーイングを目指す

今、社会のあり方が急変しています。これまでの社会は「産業社会」と呼ばれ、モノの生産と流通を加速・拡大することによって経済利益を生み出し続け、その経済利益を原資として人々の生活に利潤と幸福をもたらしてきました。この産業社会では、モノを効率よく生産・流通する能力、そのために決められた手順を忠実に遂行する能力といった、労働の効率性に必要な力が人々に求められてきました。

しかし、私たちが暮らす社会は「知識社会」へと移行してきています。知識社会では、知識や情報や対人サービスの提供、そして新しい知識の創造が大きな経済利益を生み出します。そして、知識や情報を交換するために人々の移動と交流が増加し、グローバル規模の経済圏と文化圏が拡大していきます。知識を基盤とした新しい経済は、産業社会よりも多くの人々に利潤と幸福をもたらしつつあります。しかし、知識と情報の発展により技術はより複雑化し、グローバル化の拡大によって経済の国際競争も激化するのが知識社会です。

知識社会は Society 5.0 とも呼ばれます。Society 5.0 では、人工知能（AI）やロボティクスといった科学の先端技術がめざましく進歩し、あらゆるモノにインターネットが接続して人々の生活をサポートし、さらには AI、ロボット、インターネットの技術によって人の能力までもが拡張していきます。また、人は多くの情報、すなわちビッグデータにアクセスすることが可能になり、そのビッグデータが私たちのモノやコトへの嗜好や関心の傾向を読み取り、適切な情報や問題の解決方法を導き出してくれます。Society 5.0 の中で、私たちの生活はより良く改善され、その結果、私たちは多くの時間を創造的な仕事や余暇に費やすことができるようになります。

しかし、私たちの生活が便利になるのと同時に、世界はより不安定で移り変わりやすく、不確実で信頼あるものを見定めることが難しく、科学技術や人間関係がより複雑になり、そうした曖昧模糊とした状況で私たちは適切な判断を行わなければならなくなってきました。この世界は、「不安定（Volatility)」「不確実（Uncertainty)」「複雑（Complex)」「曖昧（Ambiguity)」それぞれの英語の頭文字をとって「ブーカの世界（VUCA World)」と呼ばれています。そして、このブーカの世界は「危機と隣り合わせの世界」と捉えることもできます。例えば、地球規模の気候変動によって日本国内でも想定外の災害が増加し、新型コロナウイルス感染症パンデミックによって私たちの暮らしと生活が制限されています。また他国では、政情不安による暴動増加や民主主義の崩壊といった「危機」が起こっているのを私たちは目の当たりにしています。こうした「危機」がいつどこで私たちに迫ってくるのか分からず、そこで、可能な限りその危機を回避し、危機が起きたとしても

柔軟に対応して解決するための能力を私たちは備える必要があるのです。

また、このブーカの世界で私たちは、個人の生活の質をより良い状態に保ちながら、地域が抱える問題に常に開かれ、地域の人々とともに協力してその問題解決にあたることが必要になります。そして、個人や地域のためだけでなく、世界そして地球規模の問題や課題に目を向け、その問題や課題の解決のために行動することが求められます。すなわち、個人・地域・世界・地球のより良い状態＝ウェルビーイングの実現を目指して、一人ひとりが責任をもって、互いに助け合い、力を合わせて行動することが必要なのです。

経済協力開発機構（OECD）では現在、Education 2030 プロジェクトとして、これからの社会で私たちに求められる能力の研究を進めています。このプロジェクトでは、人が社会に積極的にかかわり、他者や環境をより良い方向へと前進させたり励ましたりする能力を「エージェンシー」という言葉で表現しています。そして、このエージェンシーを中核にして、新しい価値を創造する力・責任ある行動をとる力・対立やジレンマに対処する力といった大きな能力を育み、個人・地域・世界・地球のウェルビーイングを人々が協力して実現していくことを提唱しています。

②主体的な学び、対話的な学び、深い学び

Society 5.0 とブーカの世界が進行する中で、世界各地の国や地域で子どもたちに個人・地域・世界・地球のウェルビーイングを実現可能にするための高次の能力を育む「21世紀型教育」が推進されています。この世界的な動きと連動して、日本でも「主体的・対話的で深い学び」と「社会に開かれた教育課程」の実現が学校教育に求められるようになりました。

この要請に対して日本の学校と教師たちは、産業社会で支配的だった知識伝達型の教え方から脱却し、子どもたちが主体となる学びをデザインし、ペアやグループで学び合う協働学習を授業に積極的に組み込み、子どもたちが学ぶ環境を学校と教室から地域、そして世界へと広げ、実社会で起こっている問題を子どもたちとともに探究し、さらにデジタル教科書やタブレット端末を適切に活用して子どもたちの個性や能力に応じた支援を行なっています。こうした学びの中で子どもたちは、社会生活の基盤となる基礎的な読み書き・計算能力や人と関わる社会的な能力を育みながら、健康な生活を送るための身体的なスキルを向上させ、芸術的なスキルと見識を育み、複雑な概念や理論を深く理解していくのです。

これらの学びの変化に対応して、子どもたちの学びの実態を把握するために毎年実施されている全国学力・学習状況調査の内容も変化しています。これまでは、学校で学ぶ内容（モノやコト）としての「知識」を問う問題形式で子どもたちの学力を把握してきましたが、2019 年からは「知識」と「活用」を一体的に問う問題形式に変更されているのです。

また、高校入試・大学入試でも、子どもたちの「知識」だけでなく「能力」を問う新し

い形式への挑戦が始まっています。例えば、近年の高校入試では、あるトピック（話題）に対する自分の「考え」を問う問題や「判断」を表現する問題が増加傾向にあります。大学入試も同様で、さらに高校生までの学びのあゆみ、特に地域での学びや国際的な活動を通した探究のあゆみを評価する推薦入試やAO入試が国公私立すべての大学に広まっています。

このように、子どもたちの学びとそれを評価する方法も「主体的・対話的で深い学び」と「社会に開かれた教育課程」の実現に向けて変化してきているのです。そしてもちろん、「主体的・対話的で深い学び」と「社会に開かれた教育課程」への挑戦は、永平寺町の学校と教室のあちこちで見ることができます。しかし、この挑戦は全国的にもまだ端緒についたばかりですので、これからさらに「主体的・対話的で深い学び」と「社会に開かれた教育課程」の実現に向けた研究と研鑽が学校と教師たちに求められます。

主体的な学びとは、子どもたちが「もっと知りたい」「もっとできるようになりたい」という意欲をもって学びに自ら取り組み、学ぶ内容（モノやコト）と学ぶことそのものを好きで好きでたまらない状態になることをいいます。そして、人は主体的に学び始めると、その学びに必要な知識やスキルを自ら向上させるようになり、学ぶ内容（モノやコト）への見識を深め、学び方もより良く改善することになります。

対話的な学びとは、人が他者と協力して対話する中で学び合う「仲間づくり」だけではありません。人が学ぶ内容（モノやコト）と出会い対話することで世界の成り立ちを理解していく「世界づくり」、そして仲間との対話や世界との対話を通して自分自身と出会い対話する「自分づくり」を含む、３つの対話を実現することが対話的な学びです。

そして深い学びとは、学ぶ内容（モノやコト）を単に暗記してテストで素早く再現することではありません。学ぶ内容（モノやコト）を互いに関連づけながら整理し、それを知識として複雑な問題状況の解決に活かすこと、新しい価値の創造に活かすことが深い学びなのです。そして、知識を活用するために考える力、人とかかわる力、行動する力、探究し続け学び続ける力といった多様な能力を発揮し育むことが深い学びの本質なのです。

また、「社会に開かれた教育課程」とは、学校における子どもたちの学びを社会へと理念的に結びつけていくことではありません。学習環境を学校・教室から地域・世界へと広げ、子どもたちが実社会に参画しながら、個人・地域・世界・地球のウェルビーイングの実現に向けたエージェンシーをはじめとした能力を育むことのできる教育課程をデザインすることが「社会に開かれた教育課程」です。

したがって、永平寺町のすべての子どもたちが「主体的・対話的で深い学び」と「社会に開かれた教育課程」の中で、Society 5.0とブーカの世界で求められる能力を伸ばしていくためには、そして個人・地域・世界・地球のウェルビーイングの実現を見すえて行動していくためには、永平寺町の学校と地域、そして家庭が今よりもっと協力し、豊かな学びの機会を子どもたちに提供することが期待されるのです。

③生涯にわたって子どもたちと大人たちが学び続ける学校・地域・家庭

永平寺町のすべての子どもたちに豊かな学びの機会を提供するためには、学校が地域と家庭をつなぐ「ハブ」の役割をこれまで以上に担う必要があります。

学校では、教育の専門家である教師たちを核にして、すべての教職員でこれまで子どもたちの学びと育ちに効果の見られる教育方法や授業モデルを確認しつつ、そこに新しい教育方法や授業モデルを組み込む挑戦に取り組むことが期待されます。特に、子どもたちの学びの経験が学校や教室の中だけで閉じないよう、教師たちは地域内外に点在する学びの機会を紡ぎ、子どもたちを地域や世界とつなぎ、多様な他者との出会いと対話を通した子どもたちの世界づくりを支える必要があります。

こうした挑戦を学校で推進するには、教師たちが管理職と学校職員と互いに助け合い、学び合うことのできる学校文化と、永平寺町内外の学校間ネットワークを編み込む必要があります。学校も教師も、単独では大きな力を発揮することはできず、新しい挑戦を長く続けることもできません。永平寺町の学校が互いに手を携えることで、例えば教師たちが新しい教育方法や授業モデルを協働開発する、授業研究をはじめとした校内研修を開き合うといった、新しい形の協働の取り組みが期待されます。そして、永平寺町外の学校ともネットワークを結び、「主体的・対話的で深い学び」と「社会に開かれた教育課程」への挑戦を吟味し合い、知恵を共有し、新しい教育方法やカリキュラムを創造していくのです。

また、教師たちの生涯にわたる力量形成を支えるために、多様な研修機会を保障する必要があります。OECD の 2018 年国際教員指導環境調査では、日本の教師の１週間あたりの勤務時間は小学校で 54.4 時間、中学校で 56.0 時間と同調査参加国・地域の中で最長で、一方で職能開発にかける時間は小学校で 0.7 時間、中学校で 0.6 時間と同調査参加国・地域の中で最短という結果でした。こうした教師の職務状況を踏まえた上で、永平寺町は福井県ならびに県内の高等教育機関と連携しながら、教師たちが新しい教育方法や授業モデルに協働で挑戦するための研鑽を積み、学校内外の学びの機会をつなぎ、それを可能にするシステムを構築する必要があります。特に、永平寺町の学校それぞれの組織力の向上、さらには教師一人ひとりの力量形成を支えるためには、教師教育の専門的知見と資源（リソース）を豊かに有する福井大学連合教職大学院との協働連携が不可欠になるでしょう。

これらの学校と教師たちの挑戦を支えるためには、地域と家庭の厚い協力と信頼が不可欠になります。

「主体的・対話的で深い学び」と「社会に開かれた教育課程」を実現するには、学校と地域で連携した探究型やプロジェクト型の授業モデルによる学習デザインが必要になります。地域の歴史、伝統と文化、産業、そして人々が、子どもたちの学びにとっての最高で最大の資源になるのです。地域を形づくるモノやコトを学び探究することで、子どもたちはふるさとへの愛情を育みながら、地域が抱える課題や問題、あるいは地域が誇る魅力

に気づき、その課題や問題を地域とともに解決したり、魅力を最大化するためのアイデアを生み出したりします。こうした一連の学びと探究の過程で、子どもたちはエージェンシーをはじめとした多様な能力を育んでいくのです。子どもたちの学びに対する地域の力は絶大です。そして、子どもたちの力は地域の課題解決や活性化をもたらしてくれます。学校と地域のパートナーシップは子どもたちの学びと大人たちの生活にプラスの相乗効果をもたらすのです。

家庭は、子どもたちが学校よりも長く時間を過ごす場であり、そこで保護者は子どもたちの学びと育ちの最たる当事者です。そして保護者は同時に、学校と教師たちの最高のパートナーであり、地域の大人の一員でもあります。子どもたちが未来社会の担い手として健やかに育っていくために、教師たちは日々、子どもたちの思いや気持ちに心を砕き、新しい教育方法や授業モデルの研鑽を熱心に続け、子どもたちに豊かな学びを提供しています。こうした教師たちの熱誠あふれる挑戦を、保護者は子どもたちの学びと育ちの当事者としてサポートしながら、最高のパートナーとして教師たちを信頼し、子どもたちの学びと教師たちの教えに必要なサポートを提供していく必要があります。

例えば、学校と家庭の連携は子どもたちに安心と居場所感を与えてくれます。子どもたちは安心と居場所感を覚えることで、学びに夢中になり、未知で難しい課題にも挑戦することができるようになります。また、保護者の学習参加は教師たちの挑戦を支えながら、子どもたちの学びを大きく広げてくれます。先に述べたように、子どもたちは多様な他者との出会いと対話を通して学びを深め、世界の成り立ちへの理解を深め、自己を確立し、能力を向上させていくものです。保護者が学びの場にいることで、子どもたちは教師以外の大人、それも多様な世代の大人から学ぶ機会を得て、世界を広げ、深く考える力やコミュニケーション能力を向上させることができます。そして同時に、保護者もまた子どもたちの考えや学ぶ姿から世界を広げることができ、子どもたちとともに学ぶ楽しさと喜びを改めて味わうことができるのです。

「永平寺町学校のあり方検討委員会」の第１回ワーキンググループでも、これからの社会を見すえた能力を子どもたちに育む必要性、デジタルを活用した教育の推進、これら学校と教師たちの新しい挑戦を支える地域と家庭の役割、そして、子どもたちが中心となって学校・地域・家庭を盛り上げていくといった、さらに新しい可能性も示されました。こうした挑戦を実現するには、生涯にわたって子どもたちと大人たちが学び続ける学校・地域・家庭を永平寺町に打ち立てることが期待されます。

そのために、大人たちがすべての子どもたちの可能性を信じ、引き出すというコンセンサスをもつ必要があります。永平寺町に住むすべての子どもたちが、より良い未来社会を築く大きな可能性をもっています。子どもたちはみな、これから出会う新しい社会に希望を抱き、その社会で求められる能力を希求し、その能力を育む学びへの挑戦意欲をもっているのです。この子どもたちの意欲は、本検討委員会で実施したアンケート結果からよく見ることができるでしょう。

④提言

教師たちが管理職と学校職員と互いに助け合い、学び合うことのできる学校文化と、永平寺町内外の学校間ネットワークを編み込む必要があります。

福井大学や福井県立大学などの高等教育機関と連携しながら、教師たちが新しい教育方法や授業モデルに協働で挑戦するための研鑽を積み、学校内外の学びの機会をつなぐシステムを構築する必要があると考えます。